

---

# 逃亡者・大神一郎～大神一郎の殺人～

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

逃亡者・大神一郎〜大神一郎の殺人〜

### 【コード】

N0038A

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

同窓会に出席した大神に殺人容疑が！真実を見つけるために大神の逃亡劇が始まる！

(第1話)

太正十二年十月、大帝國劇場・帝劇の事務局。

藤井かすみと榊原由里が帝劇宛に来た手紙の整理をしていた。

「えーっと…、真宮寺さくら様、神崎すみれ様、マリア・タチバナ様、アイリス様、真宮寺さくら様、真宮寺さくら様、と…」

「…ファンレタアばかりだね」

傍らで手伝っていた大神一郎が言う。

「そうですね、一日平均百通は来ますからね。こうなると整理も大変で…」

と、由里が、

「これはカンナさん宛てね。で、これは紅蘭、と…。あら？ これ大神さん宛だわ」

「本当かい？」

「ええ」

由里が大神の前に封筒を差し出す。

「大帝國劇場内 帝國華撃團 大神一郎少尉殿」と宛先が書いてある。

「誰からだろ？」

「宛名が『少尉』って書いてありますからね……。海軍の関係の方じゃないですか？」

「だったら、米田支配人やあやめさんを通せば済むことじゃないか。陸軍と海軍の違いはあってもふたりとも上官なんだから……」

大神は封筒を開いた。

中をのぞいた大神は一回頷くと手紙を折りたたんで自分のポケットにしまいこんだ。

「…何だっただんですか？」

由里が聞くが、

「ん？ いや、士官学校時代の級友からさ。来週の土曜日に同窓会

をやるから来てくれないか、って」

「同窓会ですか……」

「丁度いいじゃないですか。花組のほうも丁度休演日だし、大神さんのお仕事は私達が手分けしてやってあげますから、行ってきたらどうですか？」

かすみが言う。

「ああ。じゃあ、来週の土曜日は米田支配人に休暇をもらわないとね」

そして土曜日になった。

「海軍士官學校太正十一年度卒業生同窓會會場」と看板が立っている料亭がその同窓会の会場だった。

「……ここか……」

久し振りに帝国海軍の白の軍服を着た大神は制帽をかぶるとその店の中に入っていった。

\*

それから程なく同窓会が始まり、場も和やかになってきた頃。

「……おお、大神か！」

大神に一人の若者が近寄ってきた。大神の同期生であった小野寺俊一であった。

「……小野寺！ 久し振りだな！」

「ま、飲めや」

小野寺が徳利を大神に差し出した。

「頂こう」

そして小野寺は大神の猪口に酒を注ぐ。

「……どうだ、大神。最近は？」

「相変わらずさ。……そういうお前はどんなんだ？」

「こつちもだよ」

「おお、大神じゃないか！」

二人が話しているところに3人の若者が近付いてきた。

「千葉、増田、それに広沢！」

彼らもまた大神の士官学校時代の友人である千葉和也、増田敏光、広沢功治だった。

「久しぶりだな」

「ああ、こちらこそ。…ところで大神」

「何だよ？」

「お前、そういえば帝国華撃団に配属してるんだよな」

「ああ、そうだけど」

「どうだい、女の子に囲まれている生活は？　ちよつとした王様気分じゃないか？」

「まさか。体のいい雑用係だよ」

\*

そして同窓会はかなり盛り上がってきた頃のこと。

「悪い。ちよつとごめんな」

相変わらず大神の傍で大神と話をしていた小野寺が立ち上がると部屋を出て行った。

どうやら小用に行ったようだ。

「…小野寺のヤツ遅いな」

「随分時間かかてるな」

そう、小野寺が小用を足しに行ってから既に20分以上経っているのだ。

「ちよつと見てくるよ」

そういつと大神は立ち上がった。

「悪いな、大神」

一階の廊下を歩いているときだった。

「…何だよ？」

大神は裏庭に何やら2本の棒のようなものが転がっているのを見つけた。

大神は庭に降り、それに近付いていった。

「…これは！」

大神はその転がっているものが棒ではなく、人間の足だ、と言うのに気がついた。

そしてよく見よう、と近付くと…。

「…うっ！」

思わず絶句する大神。

なんと、そこに転がっているのは小野寺俊一だったのだ。

「…小野寺。小野寺！」

大神が倒れている小野寺に向かって呼びかけるが、小野寺はピクリとも動かない。

大神はそつと小野寺に近寄る。

「…これは…！」

見ると小野寺俊一は後頭部からおびただしい量の血を流していたのだ。

既に事切れているのはあきらかだった。

見るとその傍らに棍棒のようなものが転がっていた。

大神はポケットからハンドカチーフを取り出すと、それで棍棒を覆いながら取り上げる。

「…まさか、これで…」

その時だった。

「…大神、何やってんだ、お前？」

大神の背後で声がした。

大神は後ろを振り向く。

「…増田…、千葉…」

見ると増田と千葉の二人が立っていたのだ。

「…大神。お前、何持ってたんだ？」

「え…」

大神は自分がさっきから棍棒を持ったままになっているのに気が

ついた。

「こ…これは…、その…」

「大神…。お前まさか、小野寺のことを…」

増田が言う。

「ち、違う。オレじゃない…オレじゃないんだ！」

「見苦しいぞ、大神！ この期に及んで言い逃れするのか！」

「違うんだ、オレじゃないんだ！」

「いいからこっちへ来い！」

そういうと千葉と増田が大神の両腕を掴んだ。

「…くっ、仕方がない…」

そういうと大神は左足で増田の右足を掬った。派手な音を立てて

増田が素っころんだ。

「増田！」

そして大神は返す刀で千葉の鳩尾に膝蹴りを叩き込む。

「…うっ…」

千葉が前のめりに倒れる。

「カンナ…、まさかお前に教わっていた格闘術をこんなところで使うとはな…。増田、千葉、許せ。オレは今捕まるわけには行かないんだ」

そういうと大神は壁を飛び越えて行った。

「待て、大神！」

千葉が鳩尾を押さえながら立ち上がったが、そのとき既に大神は暗闇の中に消え去っていた。

\*

大帝國劇場。

時計の針は既に夜の10時を回っていた。

「…大神くん、遅いですね…」

藤枝あやめが米田一基に話しかける。

「…久し振りに友達と会ったんだ。今頃二次会でもやってるんじゃないのか？」

「でも明日からまた公演がありますし…。大神くんも九時頃には帰って来る、って私に言っただけなんですけれど…」

そのとき、支配人室の電話が鳴った。

「はい、大帝國劇場です」

あやめが電話を取る。

「はい、はい。わかりました。少々お待ちください。…支配人、お電話です」

そういつとあやめは米田に受話器を渡した。

「大帝國劇場、米田です」

米田が代わって電話を取った。

「何ですと！」

米田の表情が変わった。

「はい、はい。わかりました。それでは後ほど」

そして米田が電話を切る。

「どうしたんですか？」

あやめが米田に聞いた。

「警察から連絡が来た」

「警察から…、ってどうかしたんですか？」

「…何だかよくわからんが…、大神が人を殺したらしい」

「大神くんが？」

「…何かの間違いだとは思う。しかし、現に大神は逃亡をしているらしい」

「でも、なぜ大神くんが…」

「だからそれはわからないが…。とにかくあやめくん、至急全員を集める。勿論かすみ達もだ」

「はい！」

\*

「支配人、どうかしたんですか？」

程なくマリアたち花組の6人が支配人室に集まった。

それからすぐにかすみたち3人も支配人室にやってきた。

「…今警察から電話があつたんだが…、大神が士官学校時代の友人を殺害して逃亡しているらしい」

「何ですって？」

すみれが言う。

「ちよつと待てよ！ 隊長がそんなことするわけねーだろ！ なんかの間違いじゃねえのか？」

カンナだった。

「勿論オレだつて何かの間違いだと思つてる。しかしな、その、同窓会に出席していた、と言う大神の級友の話だと死体の傍らに棍棒を持った大神が立ち尽くしていたそうだ」

「…でも、信じられへんわ。いくらなんでも大神はんながそんなことするなんて…」

紅蘭が言う。

「だからまだ事実関係ははっきりしてないんだ。とにかくお前らはこのことに関しては余計なことは考えるな。オレとあやめくんは何とかする」

「…わかりました」

その時だった。

「すみませーん！」

正面玄関のほうで声がした。

「ちよつと行ってきます」

ドアの一番近くにいたさくらが言う。

「ああ」

程なくさくらが戻ってきた。

「…あの、支配人」

「なんだ？」

「警察の方がお見えになつてます」

\*

米田が机を思い切り叩いた。

ドカン、という大きな音が支配人室に響く。

「だから、何度も言っとなるだろう！ 大神が人殺しなんかするはずがないんだ！」

「しかしですね、米田中将。目撃者の証言では現場には被害者と彼しかいなかった、って言うことですし、彼が凶器を持っていた、と言う証言もあるんですよ」

「馬鹿野郎！ 本当に大神が犯人なら、真っ先に自分が疑われるような真似をすると思ってるのか！」

「…すごい剣幕ですね、支配人」

さくらが言う。

「そうね…。支配人の気持ちもわかるけど…」

マリアが言う。

さつきから花組の面々は支配人室前で話を立ち聞きしていた。

米田の怒鳴り声がここまで聞こえてくる。

「…とにかくですね、米田中将。目撃証言もあつたわけだし、我々も大神少尉のことを容疑者とせざるを得ないんですよ」

「…とにかく、証拠つてのがその証言だけなんだろう？ 証言したヤツが、その大神が小野寺つてヤツを殺すところを見た、って言う証言でもしなけりゃ、オレは信用できねえな。今日はもう帰ってくれ！」

「…わかりました。今日はこれで」

そして刑事達は帝劇から出て行った。

米田が支配人室から出てきた。

「…なんだ、オメーラまだいたのか？」

米田が花組の一同を見ていった。

「…それで支配人、隊長は…」

「心配するな。あいつも子供じゃねえんだ。もし何か自分の身にあったら自分でカタを付けられるさ」

「…そうね、今はとにかく大神くんのことを信じるだけよ。…さ、もう寝なさい。かすみたちも帰っていいわよ」

そしてあやめは花組の一同を部屋に帰していった。

\*

翌朝。

「マリアはん、大変やで！」

紅蘭がマリアの部屋に駆け込んできた。

「どうしたの、紅蘭？」

「その、衣装部屋の衣装がなくなっとるんや！」

「なんですって？」

衣装部屋。何者かが侵入したのか、辺りは散らかされていた。

中でさくらたち四人が衣装の確認をしていた。

「……で、一体何がなくなってるの？」

衣装を確認していたカンナが、

「それが……紺の着物と袴、それからハンティング帽なんだ」

「……なにそれ？」

「ほら、よく書生はんが着とるようなヤツや。前にカンナはんが着て芝居やったやろ。あれや」

紅蘭が言う。

「何でそんな衣装なんか……」

「……一体どうしたの？」

騒ぎを聞きつけたか、あやめが衣装部屋にやってきた。

「あ、あやめさん。実は衣装がなくなっているんです」

「衣装が？ 管理は厳重にしているはずでしょ？」

「ええ。そうなんですけど……」

と、その時だった。

「…なんだろう？ これ」

と、さくらが机の上に置いてある封筒に気がついた。

さくらが封筒を拾い上げた。その周りに集まる一同。

それには「花組のみんなへ」と書かれてあった。

「…さくら、一寸見せて」

あやめが言う。さくらがその言葉に応じて封筒を渡すとあやめは中を取り出した。

「花組の皆へ

皆に迷惑を掛けてすまなひ。

知つての通り俺は今、殺人事件の容疑者として警察に追われてゐる。こんな事書めても信じてはくれなひだらうが、俺は誰かに嵌められてこのやうな目にあつてしまつたのだ。

自分に降り掛かつた火の粉は自分で拂ひおとさなければならなひだから暫く俺は皆の前から姿を消す。變装の爲に衣装を借りていく。

次に俺がみんなの前に現わるゝとき、その時は事件が解決した時だ。

米田支配人、そしてあやめさん。勝手な行動をとつて申し譯ありません。

マリア、俺の居なひ間の花組をよろしく頼む。

まう一度言はむ。この事件、必づ俺の手で解決してみせる。

だからみんな、心配しなひでくれ。

大神 一郎

大神の置き手紙だった。

「大神くん…」

「…もしかしたら、衣装を持ち出したのは隊長…」

「マリアが眩く。とさくらが、

「…そうですね。きつと大神さん、ここに来て衣装を着て出ていったんですね…」

「そうらしいわね。大神くんなら帝劇は自分の庭のようなものだもの。どこに何があるのかくらいはわかるはずよ」

「でもなんで少尉はこんなことを…」

「おそらく隊長は、自分の手で事件を解決するつもりなのよ」

「…でも、やべえんじゃねえか？ 隊長は殺人事件の容疑者なんだから」

「でも…、アイリス、お兄ちゃん信じてるよ」

「…そうやな。大神はんが人殺しするような大胆な人には見えんわ」

「…とにかく、今は事態を静観するしかないわね。私達がどうこういったって始まる問題じゃないもの」

「…そうですね。あやめさんの言う通りかもしれません」

(第2話に続く)

(第1話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(第2話)

大神が姿を消したその日の午後のことだった。

「米田支配人、おられますか？」

さくらが支配人室のドアをノックした。

「おう、さくらか。ドアは開いてるぞ、へえれ」

「失礼します」

そしてさくらは支配人室に入った。

「…さくら、何の用だ？」

「いえ、その…」

「…大神のことか？」

その言葉に一瞬言葉に詰まるさくら。

「…へ、おめえの考えてることなんか簡単にわかるぜ。大神の事を聞きてえんだろ？」

「…はい。あたし、大神さんがとてもそんなことをする人には思えないんです」

「オレだつて同じだ。ただ、大神のヤロウも何考えてんだか…」

「大神さんは自分ひとりの手で事件を解決するつもりなんだと思います。…それですね、支配人」

「何だ？」

「昨日聞いただけですからあまりよくわからないんですけど、その事件、と言うのは…？」

「ああ、それが…。警察から聞いただけだからオレもよくわからねえんだが、大神の士官学校時代の小野寺、とかいうヤツが同窓会が行なわれていた料亭の裏庭で殺られていたらしい。その点に関しては大神の同級生の千葉と増田、つてやつが証言しているらしい」

「そうなんですか…」

「そうなんですか、つて何か他人事のように言うな」

「いえ、その…、千葉さんと増田さんと言う二人が大神さんがその、

小野寺さんと言う人を殺害する場面、と言うのを見たんでしょうか？」

「いや、見てないらしいな。だから本当に大神が殺ったのかどうか、オレにもわからねえんだが…」

「…そうですね…」

\*

「あ、さくら、こんなところにいたの」

支配人室を出たあと、さくらはマリアに呼び止められた。

「なんですか、マリアさん」

「悪いんだけど…、買い物に行ってくれないかしら？ 買ってきて欲しいものはこれなんですけど」

とマリアはさくらに一枚の紙を手渡した。

「わかりました、行ってきます」

そしてさくらは自分の部屋に戻って、財布を取り出すと買物に出掛けた。

いくつかの店に寄って買い物物を済ませた後だった。

さくらはある店の前で足が止まった。

(…ここは…)

そしてさくらが辺りを見回す。

そう、そこは大神が同窓会に出席した、という料亭だった。

勿論さくらはこの店に入ったことがないのだが、米田やあやめから話を聞いてその店の名前を覚えていたのだろうか。

「…あんた一体どうしたんだい？」

いつまでもその料亭に立っていたからだろうか、さくらに一人の中年の女性が話しかけてきた。

「あ、ご、ごめんなさい」

その女性はさくらの顔を見て、

「…おや？ あんた、もしかして、帝劇の…」

「え、ええ。真宮寺さくらです」

「やっぱりねえ…。私はこの店の女将だよ。何か聞きたいこともあるのかい？」

「え…、その…」

さくらは一瞬迷ったが思い切つて聞いてみることにした。

「…あの、女将さん。3日前に大神さんがここでお友達のことを…」

「ああ、そのことかい。警察にもそのことは何度も聞かれたよ」

「あの、女将さん。女将さんはもしかして大神さんが…」

「さあ、何とも言えないねえ。私は直接その現場を見たわけじゃないし。何の物音もしなかったから」

「しなかった、ってどういうことですか？」

「うん。現場が裏庭だったからね。普段あそこは人の出入りが少ないから、別に気にも留めないんだけど…」

「女将さん、その現場、見せていただけませんか？」

「ああ、勝手に荒らさなければいいよ」

「有難うございます」

そしてさくらはその現場と言う裏庭にやってきた。

(…ここで、その大神さんの友達と言う人が…)

確かに女将の言うとおりこの現場は目に付きづらい場所である。

さくらは現場に何か落ちていないか、と屈んで周りを見回すが、これと言つて落ちていないものはなかった。

それに考えてみると警察も現場検証をしているのだ。何かあったら警察が持つていつているだろう。

(…でも、何か見つからないかなあ…)

そう思いながらあたりを探さくら。…と、

「あれ？」

何やら白いものが落ちてるのが目に入った。

拾ってみると、それは煙草の吸殻だった。

よく見ると何本か捨ててある。

「…なんでこんなところに…」

さくらは辺りを見回すが、その裏庭は道に面しておらず道を歩いていた誰かが捨てた、と言うわけではないようだ。

となると、ここで誰かが吸っていたのだろうか？

「…変だなあ…。大神さん、煙草吸わないのに…」

となると、その殺された、という小野寺と言う男が吸っていたのだろうか？

さくらは懐紙を取り出すと、吸殻を包み込んで袖に入れた。

そして立ち上がると玄関に戻り、

「有難うございました」

と、女将にお礼をいい、その場を立ち去った。

そのあとさくらはその足で警察へと向かった。

米田から話は聞いていたのだが、どうしても自分の耳で聞いておきたかったのだ。

「…というわけで、我々としても大神少尉を容疑者として考えざるを得ないわけでして」

担当と言う刑事がさくらにこう言った。

「…でも、目撃者はいないわけですよ」

「まあ、確かにそうですが…。念のためにその、現場を見た、と言う二人にも話を聞いたわけなんです、二人の証言も一致してますし…」

「そうですか…」

さくらはそれだけ言うと、

「どうもありがとうございました」

刑事に頭を下げるとその場を後にした。

\*

帝劇に戻ったさくらはシャワーでも浴びようか、と着替えを取り出そうとしたときだった。

さくらの着物の袖から何か紙に包んだものが転がり落ちてきた。  
「…これは…？」

そう、昼間拾った煙草の吸殻をどうやらそのままに入れておいたようだ。

さくらはそれを広げた。

そう、煙草は昼間に拾ったままで折れておらずそのままの状態が残っていた。

あの現場で目に付いたものを拾ってきたのだが、一本は短く、もう一本は長く吸殻が残っていた。

それが何を意味するのか、当たり前のことだが煙草を吸ったことのないさくらにはわからなかった。

\*

「…さくら、さくら！」

マリアの音がする。

「…どうしたの、さくら。ここはあなたの台詞でしょ？」

「あ。ご、ごめんなさい」

「…さくらさんも相変わらずですわね」

すみれが言う。

「最近みんな練習に力が入らないようね。…いいわ、今日はもう解散しましょう」

マリアの声に花組はその場を解散した。

\*

その夜のことだった。

帝劇のテラス。さくらは窓越しに外を見ていた。

(…大神さん、今頃何やってるんだろ…)

そんなことを考えていると

「さくら、何やってるの？」

背中が声が聞こえた。

「あ、あやめさん…」

あやめはさくらに近付くと、

「…大神くんのことを考えていたの？」

「いえ、そ…その…」

「どうやら凶星だったようね。顔に書いてあるわよ」

「…あの、あやめさん」

「…どうしたの」

「い、いえその…」

一瞬さくらは言おうかどうか躊躇った。

「だからどうしたの？ 話してごらんなさい」

しかし、相手はあやめである。彼女は必要以上のことは誰にも言わないであろう、さくらはそう判断すると、

「一寸あやめさんにお聞きしたいことがあって…」

「なんなの？」

さくらはあやめに昨日のことを話した。

「…駄目でしょ、さくら。現場にあるものを勝手に持ち出したりしちゃ」

さくらが事件現場から吸殻を見つけて持ってきた、と聞いたあやめはそう言った。

「…ごめんなさい、でもどうしても気になって」

「…まあ、でもその吸殻って言うのは今持ってるの？」

「え、ええ、ここに…」

そしてさくらは袖から懐紙を取り出した。

あやめはそれを受け取ると、それをじつと眺める。

「…別にこれといって手懸りになりそうもないわね。何処にでも売ってる普通の煙草よ」

「…そうですか…。大神さん、煙草喫わないから手懸りになると思ってたんですが…」

「あら、少なくとも海軍では大神君のように喫わない人のほうが珍しいのよ」

「そうなんですか…」

「でもそんなに心配しなくていいわよ。大神くんは誰よりも花組の

みんなのことを思ってるんですもの。さくらたちに迷惑を掛けたくなくて、きつとああいう行動を取ったんだわ」

「でも…」

「大丈夫、大神君だって子供じゃないのよ。心配しないでいいわよ」

「はい…」

「じゃ、さくら、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

そういうとあやめは自分の部屋に戻っていった。

さくらはしばらくあやめの去っていった方向を見つめていた。

…やがてさくらは何かを決意したような表情をする。

\*

翌日。

さくらは帝劇を出ると海軍省の事務局へと向かった。

「…これはこれは…。なんでまた帝國華撃團の真宮寺隊員が？」

いきなりさくらが訪ねてきたので驚いたか、その海軍の大佐はさくらを丁寧に応え、来客用のソファに座らせた。

「あ、いえ、そんなに重要な用件ではないんですが…。大神さんの事件について…」

「大神？ …大神一郎少尉のことですか？」

「はい」

「…小耳に挟んだんだが、小野寺俊一少尉のことを殺害して逃亡をしているそうじゃないですか。まったく軍法会議物ですよ」

「…その件なんですけど…。その、大神さんが小野寺さんを殺害した、という現場を見た、という方がおりますよね」

「ああ、そんな話を聞いてますな」

「あたしも警察で聞いたんですけど…。その人たちに会わせていただけませんか？」

「は？ どういうことですか？」

「いえ、その方たちに会って話が聞いてみたいんです」  
「うーん…」

さくらがそういうとその大佐は黙り込んでしまった。

「どうしたんですか？ 何かまずいことでも？」

「いえ、そういうわけではないんですが…。我々も個人のことに関してはあまり情報を教えられないんですよ」

「そこを何とかお願いできないでしょうか？ 勿論帝國華撃團の真宮寺さくらとして会うのではなくて、一個人として話を聞きたい、というだけなんです…」

「…一寸上と相談してみます。待っていてください」

\*

どのくらい待っただろうか。

「お待たせいたしました」

「どうだったんですか？」

「あくまでも一個人として会う、ということでしたら構わないそうです。こちらに彼らの下宿先を書いた紙がありますので」

そしてその大佐はさくらに一枚の紙を渡した。

さくらはさつとそれに目を通す。

「…但し、これはあなたがあくまでも個人的に会う、ということをお忘れしないで下さい。何かあっても海軍は一切関係ありませんし、今回のことに関して米田一基中將や藤枝あやめ中尉が何か言っても我々は一切関知しませんからね」

「わかってます。どうもありがとうございました」

さくらは大佐に一例をみると、海軍省を出て行った。

(第3話に続く)

(第2話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(第3話)

大帝国劇場。

さくらは海軍省でもらった紙を眺めていた。

そこには、

千葉和也

増田敏光

広沢功治

という名前が書かれていた。

いずれも大神の士官学校の同級生であり、同窓会の日に出ているという。そして、海軍省や警察で聞いた話だと大神の反抗を現場で目撃していた、と言うが…。

(…でも、大神さんがそんなことするのかしら?)

さくらはどうしてもその話が信じられなかった。

(…とにかく、明日話を聞いてみなきゃ…)

\*

そして翌日。

さくらは通りを一人で歩いていた、

「…確かこの辺なんだけど…」

さくらは辺りを見回す。

「…あれかしら?」

そこには1件のアパートメントが建っていた。

既に海軍士官学校を卒業し、それぞれ別の部署に配属になった、ということでも3人も別々の場所に住んでいるそうなのだが…。

さくらは階段を昇っていくと「千葉和也」と表札代わりに紙が貼ってあるドアが目に入った。

「…ごめんください」

さくらがドアに向かって言う。ややあつてひとりの青年が顔を出した。

「…あれ、君は…？」

「千葉和也さん…、ですよね？」

「そうだけど」

「あたし、真宮寺さくらです」

「真宮寺…？ ああ、大神の所の…」

「ご存知なんですか？」

「まあね。お芝居も一度見に行ったことがあるよ。それで、何の用なんだい？」

「いえ、一寸お話を聞きたくて…」

さくらがそう言つと千葉和也はさくらを部屋に招き入れた。

「…それで、何を聞きたいんだ？」

「…大神さんのことなんですが…」

「ああ、あの事件のことか…」

そして千葉は煙草を取り出すとマッチで火をつける。

さくらは余り煙草の臭いが好きではなかった。

しかしそんなさくらの気持ちを知つてか知らずか、千葉はせかせかと煙草を喫い、あつという間に1糵ほどに短くなってしまった吸殻を灰皿に投げ込んでしまった。

「…あの時、オレは確か増田と一緒にだつたんだよな。ちょっと酔つたみたいでさ、外の風に当たろうとしたんだよ。そしたらさ、何か裏のほうで物音がしたから、増田と一緒に駆けつけてみると、誰かが倒れてて、すぐには小野寺だつてわかんなかったんだけどな、傍らに大神がいたんだ」

「…そうですか…」

そして新たにもう1本取り出すと、火をつけ、あつという間に喫つてしまった。

「しかし、大神があんなヤツだとは思わなかったぜ」  
「どうしてですか？」

「あの野郎、オレと増田のことを殴り倒して逃げたんだぜ」  
「そうですか…」

「どうやら大神は咄嗟にカンナから教わっていた格闘術を出してしまつたらしいことにさくらは気づいたが、その事は黙っていた。」

「…それで、その後はどうだったんですか？」

「その後は広沢が来て、倒れているオレたちを見て、慌てて通報したんだ」

「そうですか…」

そしてさくらは早々に話を切り上げ、アパートメントを立ち去った。

\*

「…ここか…」

さくらは「増田敏光」と名前が書かれた紙が貼り付けてあるドアの前に立っていた。

そして扉をノックする。すると程なく、  
「誰？」

中からくわえ煙草をした男が出てきた。

「あの…、増田敏光さん、ですよね？」

「…そうだけど」

そう言つとまずでは自分の前に立っている人物がさくらだ、と気づき、

「あ…、君は…」

「はい。大神さんの所の真宮寺さくらといいます」

「ま、まあ、立ち話もなんだから中に入って」

「こんな所にさくらのような情勢がいきなり訪問してくると思わなかつたのだらう、増田は慌ててくわえていた煙草を灰皿に捨てた。かなり吸っていたのだらうか、灰皿の上にはうずたかく吸殻が乗

っていた。

ただ、どれもこれも半分以上残っている吸殻だった。

「ふうん、あのことで話を聞きたいのか」

「はい。あたし、どうしても大神さんが人殺しをしたなんて信じられないんですけど…」

「でもな、オレと千葉が見た時は大神が呆然と立ち尽くしていたんだぜ」

「そのとき、増田さんは何か物音とかを聞いたんですか？ ……例えば争う音だとか」

「…いや、何も聞こえなかったな。…君の話だと現場を見たそうだから知ってると思うけど、あの現場は少し離れた裏庭だからね。よほど大きな物音でもなければ聞こえなかったと思うけど」

「…じゃあ大神さんが犯人じゃない、ということもありえるんですね？」

「…そうかもしれないけど、もし大神が犯人じゃないとして、だ。何で大神が棍棒を持って小野寺の隣に立ちすくんでいたんだ？」

「…そりゃあ、誰だってそのときは慌てると思うし…」

「…それに大神のヤツ、オレと千葉を殴り倒したんだぜ」

「だからといって大神さんが…」

「ま、信じる信じない、は君の自由だけだな」

\*

さくらは最後の一人、広沢功治を訪ねることにした。

ドアをノックすると、

「…誰？」

広沢功治がドアを開けた。

「あたし、真宮寺さくらといいます」

「さくら？ ……ああ、大神のところの…」

「いえ、ちょっとお話を聞きたくて。よろしいですか？」

「ああ、別に構わないけど」  
そして広沢はさくらを招きいれた。

「…それで、何の用なんだい？」

「大神さんのことなんです…」

「…ああ、小耳に挟んだんだけど、大神のヤツ逃げ回っているらしいな。…まったくアイツらしくもねえ…」

そういつと広沢は煙草をくわえ、火をつけた。

部屋の中に煙草の臭いが充満していたからである。

思わずさくらはムツという表情を見せる。

「…どうしたの？」

「あ、いえ。何でもありません」

慌てて取り繕うさくら。

(…士官学校、って煙草を吸う人が多いのかしら?)

煙草の臭いが嫌いなさくらはそう思った。

「それで、何ですけど…。何でも増田さんと千葉さんから聞いたんですが、大神さんに殴り倒された、という二人を介抱したそうですが…」

「悪いけど、オレも詳しいことは知らないんだ。なにやらうめき声が聞こえたから、その声が出たほうに行ったら二人が倒れててさ。

二人から話聞くまで大神がそんなことしたなんて思ってもいなかったんだ」

「そうですか。…それで、どうしたんですか？」

「それで、って…。女将さんに頼んで二人を病院に連れて行って、それから警察に事情話したんだ。…だからさ、オレはその、大神がなんで小野寺のヤツを殺したのか、とかいった詳しいことは知らないんだ」

そして広沢は半分くらい残った吸殻を灰皿で消した。

「そうですね…」

結局何の手懸りもないままさくらはとぼとぼと帰り道を急いでいた。

\*

そのとき、さくらは見覚えのある後ろ姿を見た。紺の着物に袴、ハンチング帽。カンナが言っていた、衣装部屋からなくなった衣装ではないか？ となると…、

(…大神さん！)

さくらは直感で大神だ、と思った。

「大神さん！」

さくらは思い切って声を掛けた。

前を歩いていた男が振り向く。間違いない、大神だった。

「大神さん！」

大神はさくらの姿を確認すると走りだした。

「大神さん、待ってください！」

さくらは大神の後を追った。

百米ほど追っただろうか。ようやく追い付いたさくらは大神の腕を掴んだ。

「…さくらくん、離してくれ！」

「いえ、絶対離しません！ 大神さん、もう逃げるなんてやめてください！ …話せば…話せばきつとわかってくれます！」

「…そんなことでオレは逃げてるんじゃない！ この事件、オレひとりの手で解決するんだ。もとはと言えば、オレが原因で始まったことなんだ。…落とし前はオレの手できっちりと付けるんだ…、だから、さくらくんは手を出さないでくれ！」

「大神さん…」

さくらはまだ大神に向かって何か話したいことがあるようだ。

「…どうかしたのかい？」

「…いえ…。一寸大神さんに話したいことがあって…」

「話したいこと？」

「一時間たつたらまた来ます。それまで…、そうですね。その河原で待つててください。必ずですよ！」

\*

一時間後。

橋の下の河原に大神が座っていた。すると、

「大神さん」

さくらが何やら風呂敷包みを抱えて戻ってきた。

「さくらくん…」

「お弁当作ってきました。食べてください」

と、大神の前に風呂敷包みを開いた。

中には握り飯がいくつかとおかずの入った重箱があった。

「…じゃ、せっかくだから、いただこうかな」

そして大神が風呂敷包みを開けたときだった、

「…あと、このお金使ってください」

と紙包みを差し出した。

「それは…」

「今月のお給料の一部です」

「…し、しかし、そんなことしたら……」

「いいんです。欲しい着物やアクセサリイを我慢すればいいんですから」

「…」

大神はじつとさくらを見つめていた。

「…さくらくん……」

「…それで、さくらくん。話したいこと、ってなんなんだい？」

「いえ、その……」

そしてさくらは大神に自分が何とか大神の無実を晴らしたくて独自に事件のことを調べていることを話した。

「…そうだったのか。さくらくん、すまない。君にまで迷惑をかけ

て

「いえ、いいんです。あたしはどうしても大神さんの容疑を晴らしたいだけなんですから」

「…そうか。わかったよ、さくらくん」

そしてさくらは風呂敷包みを持って立ち上がったときだった。

「さくらくん」

「はい？」

「…これからも事件について調べてくれないか？」

「はい、わかってます」

「それと、今日、ここでオレに会ったことは誰にも言っちゃ駄目だよ。まだオレはみんなの前に姿を現すわけにはいかないんだ」

「はい」

「あ、それから…」

「なんですか？」

すると大神はなにやらさくらに耳打ちをする。

「大神さん、そんなこと…」

「…こついつことを頼めるのは君しかいないんだ。わかったね」

「…はい」

そして大神とさくらは別れた。

(最終話へ続く)

(第3話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(最終話)

ある日の帝劇の玄関。

「…？ さくら何処にいるか知らない？」

マリアが紅蘭に聞いた。

「…いや、ウチ知らんわ」

「変ねえ…。何処に行ったのかしら？ 最近、さくらの様子が変よね」

「そうやな…。ここの所何処にもいない、思ったらいつの間にか帰って来とるいうこと多いわ」

「ほんとに何処行つたのかしらね…」

「…ホンマやな。大神はんがあんな事になつてもうて今度はさくらはんまでが…」

その時、

「…こんなところに居たのね」

あやめが二人のもとに来た。

「あ、あやめはん、何か用でつか？」

「何か用、じゃないわよ。稽古の時間よ」

「あ、もうそんな時間ですか。紅蘭」

「わかつたわ」

「…ところでさくらは？」

あやめもさくらが居ないことに気がついたようだった。

「あやめさんも知らないんですか？」

マリアが聞く。

「え？ あなたたちも知らないの？」

「ええ。今、紅蘭とも話してたんですよ」

「…まったくさくらも…。とにかく二人は楽屋に行つてなさい」  
「はい」

\*

そして楽屋にさくらを除く全員が集まった。

聞いてみるとすみれ、カンナ、アイリスの3人もさくらの姿を見かけていない、と言う。

「…おかしいわね。さくらが誰にも言わずに出かけるなんて…」

その時だった。

「すみません、遅くなりました」

楽屋の外で声がした。

見るとさくらが扉の前に立っていた。

「さくら、何処行つてたの？」

そう言いながらそこにいた花組の全員とあやめがさくらを出迎えた。

「いえ、ちよつと…」

そう言いながらマリアはさくらの後ろを見た。

「…その人は誰なの？」

そう、さくらの後ろに一人の紺の着物にハンチング帽をかぶった一人の男が立っていたのだ。

マリアはその男をじつと見る。

「…まさか…。隊長…。隊長ですか？」

そこにいる全員が「え？」という表情をする。

「…どうやらわかったようだな。…その通り、オレだよ」

そう言うと大神はハンチング帽を脱いだ。

それは数日振りに見る大神の顔だった。

「隊長…」

「お兄ちゃん、一体何処行つてたの？ アイリス心配してたんだよ！」

「ん？ 一寸な…」

その時だった。

「…見つけたぞ、大神だな！」

扉の外側の方で声がした。

大神が振り向くとそこに二人の男が立っていた。

「あなた方は……」

「我々は警察だ！　大神によく似た男を見つけたので尾行してみました。やはりお前だったのか！」

「大神一郎、殺人および死体遺棄の容疑で逮捕する！」

「いい加減に観念したらどうだ？」

次の瞬間、大神は信じられない行動に出た。

「うおおおおっ！」

大神は拳銃を取り出すと傍にいたさくらの腕を掴む。

「きゃああああ！」

「さくらっ！」

「さくらはん！」

大神はさくらの腕を逆手に捻りあげ、こめかみに銃口をつきつける。

「動くな！　さくらくんがどうなってもいいのか！」

「……しよ、少尉……」

「マリア、そこをどけ！」

大神は花組に向かって拳銃を向ける。

「どくわけにはいきません、隊長！」

マリアが言う。

「どけと言ったらどくんだ！」

さくらがマリアに、

「マリアさん、ここは大神さんの言うことを聞いてください！」

「し、しかしね。さくら……」

その時だった。あやめが花組の前に立ち、

「……わかったわ。みんな、ここは大神くんの言うことを聞きましょう」

「しかしあやめさん……」

「さくらが人質なのよ！　ここでへたに大神くんを刺激したら取り返しのつかないことになるわ！」

大神はニヤリ、と笑うとさくらのこめかみに拳銃を突き付けたまま部屋を出ていった。

さくらは玄關で解放されていた。

「さくら、怪我はない？」

「え、ええ。大丈夫です」

「大神はんがあんなことするなんて思いもせんかったわ……」

「……隊長、見損なつたぜ。やっぱり隊長が殺つたのかよ……」

カンナが言う。

「アイリス、お兄ちゃんのこと信じてたのに……」

と、あやめがその様子を見て、何か考え事をしていたようだった。

「……あやめさん、どうかなさいましたの？」

すみれが聞く。

「……え？　あ、何でもないわ」

それから数時間後のことだった。

帝劇米田支配人室に一本の電話が入ってきた。

大抵は事務局経由で回ってくるのだが、こうして直接支配人あてに掛かってくる、ということとはよっぽどの急用なのだろうか。

そう思いながら米田は受話器を取った。

「……大帝国劇場、米田です。……あ、花小路さん、一体何の用ですか？」

\*

ある倉庫街の一角。

そこにある小さな倉庫の一角に一人の人物が向かっていた。

先ほどその人物宛に「夜九時にこの工場にて待つ」との内容の電報が届けられたのだった。

その人物は倉庫の前に立つと扉を開けた。

その扉は鍵が掛かっているわけでもなく、あっさりと開いた。  
その人物は首を傾げながら、その倉庫の中に入った。

…と、

「…待つてたぜ」

中に入るといきなりそう言う男の声が聞こえてきた。

「…その声は？」

不意に部屋の中が明るくなった。

その人物の目の前にはハンチングを目深にかぶり、紺の着物を着た人物が立っていた。

「…おまえ、まさか…」

「…そうだよ、オレだよ」

そう言う男はハンチング帽を脱いだ。

「…お、大神…」

そう、その男は大神一郎だった。

「お…、大神、お前なんでここにいるんだ？」

「…お前に用があるんだよ」

「用だと？」

「ああ、あの電報を打ったのはオレだよ。お前に聞きたいことがある  
つてな」

「オレに？」

「…話してもらおうか、何でお前が小野寺を殺したのか。…どうな  
んだ、増田！」

「…ば、バカ言うなよ、大神。お前は自分で小野寺を殺したんだろ  
？ 何でオレに罪をなすりつけようとするんだ！」

増田敏光は声を荒げて大神に言った。

「…それはこっちの台詞だぜ、増田。よくまあ、オレに小野寺殺し  
の濡れ衣を着せたな」

「…お前がそこまで言うなら、オレが殺した、と言う証拠があるん

「だろうな？」

「ああ、お前が小野寺を殺した、と言う証拠はここにあるぜ！」  
そういうと大神は紙袋を取り出した。

中には煙草の吸殻が2本入っていた。

「これがどうかしたのか？」

「この吸殻は現場でさくらくんが拾ったものだ。…よく見る。一本は短くて、もう一本は長いよな」

「それがどうかしたのか？」

「一人の人間がこんな風に一本はここまで短く、もう一本はここまで長く吸うことはありえない。つまり、これは他にもう一人の人物がいた、ってことなんだよ」

「それが何の証拠になる、ってんだ？」

「忘れたか？ オレは煙草は吸わないんだぜ」

「た…、確かにそうかもしれないな。でもよ、大神。士官学校には煙草吸っているヤツなんていくらでもいただろ！」

「ああ。士官学校じゃ煙草は黙認だったからな。確かにさくらくんがお前に話を聞きにいった時も煙草を吸っていたそうだな。お前だけじゃない。千葉も広沢も煙草を吸っていたそうだしな」

「それが？」

「さくらくんが言っていたし、オレも思い出したが、お前確か吸殻を半分くらい吸ったらもう煙草を消してたよな」

「ああ、オレは何口か吸ったら満足するからな。小野寺や千葉みたいに最後の方まで吸うなんてみみっちい事はしねえな。だからといってオレを犯人扱いするのか？ 大体、お前だって広沢もオレと同じように半分くらいしか吸わないのを知っているだろう？」

「ああ、確かにな。…でもな、お前はもうひとつ、犯人だという証拠を持つてるんだよ！」

「証拠だと？」

「ああ。小野寺の死体が発見された時だ。確かお前、オレにこんなことを言ったよな？ 『お前まさか、小野寺のことを』って」

「それがどうかしたか？」

「確かにあの時、オレは小野寺の傍らに転がっている棍棒を拾って小野寺の傍らに立っていた。そしてそれを見たのがお前と千葉の二人だった。それで気がついたんだが、お前たちはオレの背中から声をかけたな？」

「それで？」

「あの時オレは庭になにやら棒の様なものが転がっているのを見て何かと思って近付いて見てようやく小野寺が倒れていると知ったんだ。あたりは暗かったし、オレだって近付いてようやく小野寺が何者かによつて殺害されている、と知ったんだ。それなのに何故お前は一目見ただけで傍らに転がっているのが小野寺の死体だと知っていたんだ？」

「…そ…、それは…？」

「どうやらボロを出したようだな。お前の言った余計な一言がオレにお前を疑わせる要因を作ったんだよ！」

「…やれやれ。どうやらオレはお前のことを少し甘く見くびっていたようだな」

長い沈黙の後、増田が口を開いた。

「…増田、やはりお前…」

「ああ、そうだよ、オレが小野寺を殺したんだよ」

「…お前、何で小野寺を…」

「我慢できなかったんだよ、アイツのやってることが」

増田は吐き捨てるように言った。

「我慢できなかった？」

「…あれは2ヶ月くらい前のことだ。ある夜、オレはある用を済ませて帰るところだったんだ。海軍から車を借りて、それに乗ってな。その時、急に前に飛び出してきた子供を轢いちゃったんだよ」

「…何だつて？」

「それでオレ、そのまま逃げちゃったんだ」

「…それって轢き逃げじゃ…」

「ああ。道は暗かったし、誰も居なかったからバレないと思ったしな。…それにあの時オレは酒を飲んでたし…」

「…おまえ、飲酒運転までしてたのか」

「ああ。幸い奇跡的に相手は軽症で済んだんだけどな。…でもな、それをたまたまその日、休暇だった増田が目撃してたんだよ」

「増田が？」

「ああ、それでアイツ、オレに向かって『黙っててやるから口止め料よこせ』と言ったんだよ」

「…つまり、お前を強請ってたってことか」

「…そういうことだな。…あとはお決まりの通りさ。段々とあいつの要求額が大きくなっていったよ。オレの我慢の限界を超えちまったんだよ。丁度その頃に士官学校の同窓会の連絡があったからな。

それを使用してやろうと思ったんだよ。そしてあのときにあいつを呼び出して…。上手くいきや誰かに罪をなすりつけられると思ったんだよ」

「それがたまたまオレだった、ってことか。…オレも随分と舐められたものだな」

「…さてと、おまえがそこまで見破っていたとはな…。そこまで知られたら仕方ねえ。おまえも只で帰す訳にはいかねえな」

「…それはどうか？」

その言葉にも動じず大神が不敵な笑みを浮かべた。

「どういうことだ？」

「…話は全て聞かせてもらったよ」

いきなり大神の後ろで声がし、一人の男が入ってきた。

「よ…、米田中将閣下！」

増田が直立不動になる。

そう、その男は大帝国劇場支配人にして、帝国陸軍中将の米田一基、その人だった。

「増田敏光、既にお前のことは陸海軍及び警察に連絡した。間もな

く警察と軍の関係者がここにやって来る。軍法会議を覚悟しておけ。以上だ」

\*

そして警察と軍の関係者に増田が連れて行かれた。

それを見送る大神と米田。

「…やれやれ。花小路伯爵から連絡があつて来てみりゃ、こういうことだったとはな…」

「米田中将、ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

大神が深々と頭を下げる。流石にこの時は「支配人」と「モギリ」の関係ではなく「陸軍中将」と「海軍少尉」の関係のようだ。

「まあいいさ。事件の真相が明らかになつたんだからな。ま、とりあえずご苦労さん、つて所だな」

「ははは…」

「さ、大神、帰るぞ。あやめくんや花組の連中も心配してるぞ。せいぜいみんなに謝っておくんだな」

「はい」

\*

帝劇のサロン。大神と米田が戻ってきて、大神が事の次第を話すとようやく帝劇に明るい雰囲気に戻ってきた。

「いやあ、ようやく事件が解決したな」

「一時はどうなることかと思つたわ」

「本当に少尉があんな行動を取つた時、私、驚いてしまいましたわ」

「ああいうこともあるか、と思つてね。あの時はああでもないとなげることが出来なかつたし…。まあ、さくらくんのおかげでなかないいい芝居ができたよ。な、さくらくん」

「え？」

そこにいた全員の目がさくらと大神に注がれた。

「はい。あれ、あたしと大神さんが前もつて打合せて、やったことなんです」

「…つてことは、さくらはんを人質にとつたアレ、二人のお芝居や

「つたんか」

「ああ。実はさくらくんにはいろいろと情報を集めてもらったんだ。おかげでオレの知らなかったことがいっぱいわかったよ」

「…つまりさくらさんは少尉のスパイをやっていた、ってことなんですよ」

「なんだよ、だったら前もってあたいたちに言ってくればよかったのに。あたいは本当に隊長が殺ったのかと思っただぜ」

「前もって言っただらせつかくの芝居が台無しだろ。それに、よく言うだろ？ 『敵を欺かんと欲すればまず味方より』ってさ」

「…やっぱりね。何か変だとは思ってたのよ」

あやめが言った。

「変？ 何でや？」

「あの時、妙にさくらが落ち着いてたように見えたのよ。それに何やら着物の袖を探ってたようだったし…。だから大神くんがどう出るか見てみたくて、大神くんの言うとおりにしたのよ」

「ごめんなさい。あれは大神さんに言われて、あたしがこれまで調べてたことを書いた紙を探してたんです。あの後、玄関で大神さんに紙を渡して、大神さんと別れたんです」

「ま、オレも芝居がバレやしないかひやひやしてたんだけどな。…でも、さすがさくらくんの演技力はたいしたもんだったよ」

「…まったく隊長もさくらも…」

\*

それから数日後。

「あ、大神さん」

由里が大神を呼び止めた。

「なんだい、由里くん」

「大神さんあてに手紙が届いてますよ」

「オレに？」

そう言うと大神は由里の差し出した封筒を開いた。

中には今度中学の同窓会をするので来て欲しい、と言う案内状が

入っていた。

「…ははは…」

「？ どうしたんですか？ 大神さん」

「いや、なんでもないよ」

そして大神は足早に由里の元を去った。

(…同窓会はもういいよ…)

(おわり)

（最終話）（後書き）

（作者より）この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0038a/>

---

逃亡者・大神一郎～大神一郎の殺人～

2008年11月7日06時30分発行